

2019年7月17日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 甲賀 崇史
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 幼児の靴履き行動におけるスキル発達の生態学に関する横断研究
論文題目（英文） A Cross-Sectional Study of the Ecology of Skill Development in Young Children's Learning to Put on Shoes

公開審査会

実施年月日・時間 2019年6月25日・13:00-14:30

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	根ヶ山 光一	博士（人間科学）	大阪大学	発達行動学
副査	早稲田大学・教授	外山 紀子	博士（学術）	東京工業大学	発達心理学
副査	早稲田大学・教授	古山 宣洋	Ph.D.（Psychology）	シカゴ大学	生態心理学
副査	早稲田大学・教授	前橋 明	博士（医学）	岡山大学	子どもの健康福祉学

論文審査委員会は、甲賀崇史氏による博士学位論文「幼児の靴履き行動におけるスキル発達の生態学に関する横断研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問:本研究は月齢で括り平均値に限定して検討したことにより、子どもの側の contributionを見落としているのではないか。

回答:本研究のデータは、横断的に年月齢毎の平均値を算出したものであり、今後縦断的研究により行動の初発について検討する必要がある。

1.2 質問:考察の「安定性を確保する系」から「直立性を回復する系」という説明には、物足りなさを感じる。

回答:本研究では、「靴と足を近づける」と「靴を踵に押し込む」のみを対象とした。しかし確かに、広く生活の流れにおいて、靴を履くことは屋内の活動から屋外

の活動へ移行する合間に生じる行動であるという視点も必要である。

1.3 質問：行動の通過率や本研究の結果の一般化について考えはあるか。

回答：通過率について、先行研究によれば2歳半に一人で靴を履ける子どもが50%に到達する。また、園環境などの違いにより本研究の成果の一般化には限界がある。

1.4 質問：研究2で「0歳児クラスから」と表記されているが、実際に検討されているのは15ヶ月児からである。この点の説明が必要と考える。

回答：研究2では、0歳児クラスの乳幼児を対象にしたが、14ヶ月以前の子どもには靴を履く事例がほとんど観察されなかったため、15ヶ月以降の幼児を検討した。

1.5 質問：生態学的に拡張されたスキル発達理論の図が分からない。

回答：ご指摘にしたがい、生態学的に拡張されたスキル発達理論の図をわかりやすく改良する。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 本研究のデータは「制約(constraint)」のニュアンスとは異なるため、「制約」について検討の余地がある。

2.1.2 本研究は、靴履き行動で人的・物的環境を利用する際の、子どもの側のcontributionに関わる記述が弱い。行動の初発は、一事例を丁寧に追うことで見えてくる。

2.1.3 表題について「生態学的スキル発達理論」など本研究の独自性を明示する用語を入れてはどうか。また、表題の英語表記も再検討する必要がある。

2.1.4 本研究の内容と図の対応関係において、特に意図がない線は消去した方がよい。

2.1.5 靴履き行動は、保育の文脈で次の活動につなげるための準備と考えるべきである。

2.1.6 直立性を回復する系とは、不安定な姿勢になるという意味で、安定性を確保する系と矛盾するものである。子どもが直立性の回復に挑戦することについて、効率性等に触れて論じてはどうか。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 総合考察で、「制約」という用語を再吟味し、「支援」や環境資源の「利用」とする可能性を論じた。

2.2.2 総合考察で、記録の方法やデータの収集方法の制約により靴履き行動における子どものcontributionの指摘の欠落に触れ、今後の課題として明記した。

2.2.3 主張がより明確に反映されるように表題を改変した。また英語表記も母語話者のチェックを受け改めた。

2.2.4 指摘にしたがって図を修正するとともに、図の意味を文章で説明した。

2.2.5 未来に向けて行動を適応させる予期性が統合要因として、行動発達の基底に

存在していると考え得ることを述べた。

- 2.2.6 安定性を確保する系と直立性を確保する系の統合に向けた発達的变化は、同時に子どもの効率性や柔軟性、予期性、志向性などを含む過程と考え得ることに言及した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、幼児の靴履きというこれまで基本的な生活習慣の一要素として取り扱われてきた行動について、生態学的スキル発達理論という新たな観点を取り入れて、テラスや床などという物理的環境と保育者という社会的環境の制約・支援を受け、それを能動的に利用しながら発達する子どもの姿としてとらえ直そうとしている。その目的は明確であり、フィールド場面における行動発達研究として妥当なものである。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文は保育園・幼稚園という子どもの生活の場で研究者が参与観察するという手法をとっている。それによって、子どもと保育者のふだんの行動をなるべくありのまま、多様な環境側の要因とともにデータ化することが可能となっている。それは豊かな物理的環境と社会的環境の影響下で発達する子どもの理解という本論文の目的にかなった妥当な方法論である。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文は適切な目的意識と方法の採用により、子どもが靴履きを物的・人的環境とのダイナミックな関わりを通じ、その制約と支援を受けつつ発達させること、またそれが姿勢の直立化・安定化と効率化という子ども自身の志向性と文脈の予期性や柔軟性によって達成することを重要な結論として、説得力をもって示している。その主張は行動発達研究として独自の視点を提供しており、その成果には明確性・妥当性が十分に認められる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 本論文で取り上げられた靴履き行動は、これまでは基本的な生活習慣の一つと見なされ子どもの自立の指標とされてきた。そこにスキル発達理論を適用し、マクロ水準とミクロ水準という異なるレベルのスキル構造を取り入れ、サブルーティンの入れ子構造を想定することにより、発達上の重要な行動であると示すことに成功している。
 - 3.4.2 これまでのスキル発達理論には環境との相互作用の視点が欠落しているとして、物的環境と人的環境の影響を視野に入れて研究を行っている。このように靴を履くという行動自体の発達に注目し、それを身体と環境との相互作用として論じるという視点に本論文の独創性がある。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 行動の発達を論じる場合、環境・心・身体の3要素の相互関連性が問題となるが、本論文は興味深い着眼点と妥当な方法論でそれを適切に行っており、行動発達の枠組みを大きく拡張する可能性に富んでいる。

- 3.5.2 スキル発達理論に依拠しつつも、物的・人的環境を積極的に取り込んでその理論枠組みを大きく修正する展開を提示し、発達研究の新たな方向性を打ち出していることも学術的意義として指摘できる。
- 3.5.3 直立性と安定性、それを統合する効率性、さらにそれらを物的・人的環境と結びつける志向性・予期性・柔軟性を想定するところに、視野の大きな発達観を認めることができ今後の展開が期待される。
- 3.5.4 保育園・幼稚園という生活現場における靴履きという身近な行動の発達を扱うことによって、子育ての現場における実践活動への貴重な示唆を得ている。子どもの発達における自発性・能動性の指摘と、それを取りまく物的環境の制約や人的支援、その利用について正しい認識を持つことは、子どもの保育実践にとって大きな意義がある。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 靴履き行動は環境・心・身体にまたがる学際的トピックであり、また靴は直立二足歩行と直結する人間独自の生物的・文化的道具である。したがって進化と歴史と発達という三つの時間軸にまたがる人間科学的テーマである。
- 3.6.2 本研究では、靴を身につけて環境に対処するようになる発達過程を論ずることを通じて、身体の制御能獲得、文化の取り込み、その発達途上における建物や保育者の関与、内と外・清潔と不潔（汚れ）と直結する社会的規範など、さまざまな関連領域との接点が示されている。このことは研究を多方面に賦活するものとして、人間科学への大きな貢献であると考えられる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
- ・甲賀 崇史・根ヶ山光一 (2017). 保育所のテラスにおける幼児の靴履き行動の発達の検討 保育学研究, 55(2), 52-63.
 - ・甲賀 崇史 (2017). 幼稚園における幼児の靴履き行動の発達の検討：姿勢および四肢動作の機能的変化 乳幼児教育学研究, 26, 47-62.
 - ・甲賀 崇史 (2019). 保育所のテラスにおける子どもの靴を脱ぐ操作と姿勢の発達の検討 日本家政学会誌, 70(2), 78-85.
- 5 結論
- 以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上